

編集・発行：三重県環境生活部新博物館整備推進プロジェクトチーム

ともに考え、活  
動し、成長する  
博物館にむけて

- ・三重県総合博物館の愛称が「MieMu」(みえむ)に決定しました! …P1
- ・開館前特別ワークショップ「100年残す!?三重のモノ、コト、ワタシ」を開催しました! …P2
- ・M祭! 2013に参加しました …P3
- ・新博のみっちゃん …P3
- ・基本展示室のみどころ紹介 …P4~5
- ・新県立博物館には驚きがいっぱい博物館を歩いてみよう …P6
- ・ただ今 調査研究と資料収集をしています …P7
- ・同定会 …P8
- ・お知らせ …P8

## 三重県総合博物館の愛称が「MieMu」(みえむ)に決定しました!

The new Mie Prefectural Museum's nickname was decided: "MieMu".

三重県総合博物館に愛着や親しみを持っていただくこと、全国に募集した愛称について、1,061件の作品の中から「MieMu」(みえむ)に決定しました。同時に、ロゴマークやテーマカラー、開館に向けたシンボルなどについても決定し、8月12日(月)に発表会が行われました。(山崎 章弘)

## ■愛称

選定された「MieMu」は、「Mie(三重)のMuseum(ミュージアム:博物館)」とともに「三重の夢」を表現しており、三重の素晴らしさを知ること、未来への夢を持っていただけるような博物館にしていきたいという思いが表現されていることから選定されました。

愛称の発表会があった8月12日(月)には表彰式も行われ、この愛称を応募いただいた松阪市にお住まいの中北裕子さんに、鈴木知事から表彰状と副賞(旅行券3万円分とMieMuの年間パスポート券3名様分)の目録が手渡されました。



表彰式

## ■ロゴマークとテーマカラー

ロゴマークは、愛称そのものをデザイン化しました。できるだけシンプルに「MieMu」が強調されるようなデザインにしています。

また、「MieMu」のイメージを、より視覚的に分かりやすく伝えようと、テーマカラーを設け、オレンジを選定しました。オレンジは、「対話が生まれる色」「人が集まる暖かな色」「三重の未来を照らす色」をイメージでき、「MieMu」のコンセプトを表す色として選定しました。



ロゴマーク

## ■シンボル

「MieMu」のシンボルとして、また、これまでも大事に取り組んできた「みんなでつくる博物館」という理念を象徴的に表したものとして、「ミエゾウ」を取り上げました。

ミエゾウは、学名に三重の名(*Stegodon miensis*:ステゴドン ミエンシス)がつく古代のゾウで、全長7.5m、体高4mと、日本国内で発見された陸上ほ乳類では史上最大の生きものです。

「MieMu」の建築工事中に、350万年前の地層からミエゾウの足跡化石が見つかり、約350人の県民の皆さんと一緒に発掘をするなど、「みんなでつくる博物館」の象徴でもあります。また、「MieMu」の3階にある交流創造エリアでは、日本初のミエゾウ全身骨格標本が展示され、来館された皆さんをお出迎えするなど、「MieMu」を代表する展示の一つとなります。

## 開館前特別ワークショップ 「100年残す!?三重のモノ、コト、ワタシ」を開催しました!

Before the Grand Opening, a special workshop was held.

8月24日(土)に開館前特別ワークショップを行いました。100年先まで残したいものをみんなが考えました。

8月24日(土)、開館前特別ワークショップを三重県総合博物館で開催しました。「開館前の今しかできない思い出を!」ということで、外部有志の皆さんと企画チームをつくり、4月頃から準備を進めてきました。今回、博物館の大切な仕事のひとつである「残す」ということをテーマに取り上げました。どうしたら今しかできない体験を通じて、博物館が伝えたいメッセージを参加者の皆さんと共有できるのかを何度も話し合い、企画チームの試行錯誤は開催前夜まで続きました。

当日は、100年後に残したいモノ・コトをそれぞれ考えてきた参加者28名を、当館「MieMu」(みえむ)の「収蔵資料第1号」として迎え、トラックヤードから写真室、そして収蔵庫という資料受入の流れを体験し

ていただきました。資料の気持ちになりきったところで、メッセージボードに残したいモノ・コトを書き、普段は絶対に入れない大きな展示ケースの中で「こんなモノ・コトを残したい!」と考えている自分たちを展示しました。そして、「2013年8月、こんなモノ・コトを残したい人たちがいた!」ということを残すために、思い思いの言葉や絵で、参加者全員で10m以上の絵巻物を作り上げました。みんなで作ったこの絵巻物は、大切な博物館資料として残り、100年後に展示会をしたいと思っています。

今回「残す」というテーマを取り上げたのには、このワークショップを通じて、博物館の資料をもっと身近に感じて欲しいという想いがありました。「残す」ことは、その価値を認め、みんな



で次の時代を生きる人たちへ「伝える」ことでもあります。博物館資料も、ただ保管されているのではなく、昔の人たちの手から脈々と受け継がれてきたものなのです。展示ケースの中で、展示される資料の気持ちになりきった参加者の皆さんは、その時自分が込めたメッセージを思い出して、きっと展示会を観るたびに展示された資料をもっと身近な存在に感じられるのではないのでしょうか。

当館「MieMu」(みえむ)にとっても挑戦尽くだったこの企画、たくさんの方々を支えられて無事に終えることができました。ワークショップは、何よりもその場を共有する人たちの共同作品です。参加者の皆さん、関わっていただいた企画チーム、当日スタッフが力を合わせた作品なのです。開館後も、様々なバ

ックグラウンドを持つ人が集う場をつくっていきたいと思います。

(中村 千恵)



### ●おまけ●

みんなで作った絵巻物、実は学芸員お手製なのです。きちんと100年先まで残すために、古文書と同じく和紙にこだわりました。今回の参加者で、最年少は1歳。もしかしたら100年後の展示会に、101歳になったご本人が遊びに来てくれるかもしれないと、職員一同ワクワクしています。



## M祭！ 2013に参加しました

MieMu participated in the M' festival 2013!

三重県総合文化センターで8月4日（日）に行われたM祭！ 2013に参加し、さんちゃんの紙工作とイワシのぬり絵を行ってきました。

2013年8月4日の日曜日、三重県総合文化センターで毎年実施されている、こども向けの参加体験イベント「M祭！」に参加しました。今年は「M祭！ 2013 キッズ・アート・フェスティバル」と銘打って、「みんなアーティスト」を合言葉に、当日は約3000人の来場者で賑わいました。

三重県立博物館サポートスタッフのブースでは「さんちゃんの紙工作」と「イワシのぬり絵」を行いました。10時の開場とともにさんちゃんの紙工作もイワシのぬり絵も席が埋まり、ほぼ終日この状態が続きました。さんちゃんの紙工作は16時の終了時点で、ぴったり400人のみなさんに参加していただきました。今年も三重県立博物館サポートスタッフのおもしろ博物館づくりグループが中心となり、実施メニューの立案から運営にいたるまで活躍していただきました。また、

イワシのぬり絵も194人のみなさんに参加していただきました。

「さんちゃん」とは三重県立博物館で飼育されているオオサンショウウオの愛称です。オオサンショウウオは世界最大の両生類で、国の特別天然記念物に指定されています。特別な許可が無いと飼育できないため、いつでも観察できるさんちゃんは三重県立博物館の人気者となっています。このさんちゃんをモデルにして、オオサンショウウオの体のつくりを工作体験を通して知ってもらうように、サポートスタッフのみなさんが工夫して紙工作をデザインしました。また、博物館ならではのということで、オオサンショウウオの骨格標本の展示や、エサを食べる映像上映、現在頭から尻尾まで114cmあるさんちゃんの写真パネルとの背比べなども用意しました。

一方、イワシのぬり絵



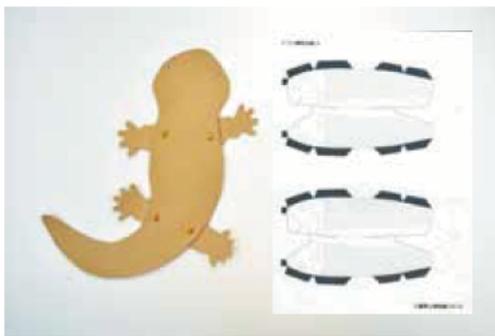
イワシのぬり絵製作中

は、三重県総合博物館の基本展示室で展示するイワシの大群を、みんなで作ったイワシの紙模型で表現するために実施しています。これからいろいろな会場でたくさんのおみなさんに参加してもらえるように実施予定です。自分のつくったイワシを新しい博物館の展示室で泳がせてみませんか。ぜひご参加ください。

(松本 功)



さんちゃん製作中



さんちゃんの紙工作完成とイワシぬり絵

## 基本展示室のみどころ紹介

The New Exhibition Area's Points of Interest

このページでは、新県立博物館のさまざまなコーナーの魅力について、シリーズで紹介していきます。

### 伊勢湾の自然のコーナー

“The Nature of Ise Bay” Area

三重県の自然のなかでも今回は伊勢湾の自然コーナーについて紹介します。地理的なことから生き物のことまでわかりやすく展示します。

伊勢湾は、水域面積が2,342km<sup>2</sup>の規模をもつ日本最大級の内湾です。その特徴は、平均水深が16.8mで最大水深も38mと浅いことから、「遠浅で広い海」であることです。海岸線は687kmと長く、人工海岸の割合は約60%で東京湾の約85%と比べても少なく、自然の海岸が比較的残されています。

伊勢湾を代表し特徴づける自然海岸が、三重県松阪市の櫛田川河口域に比較的大きな規模で残されています。松名瀬海岸と呼ばれ、そこには河口に広がる河口干潟や、後背湿地に広がる潟湖干潟、砂浜から伊勢湾に広がる前浜干潟と、3つの干潟を持っています。干潟は潮汐による潮の満ち引きの影響を受け、干満の差は約2mにもなりますが、干上がっている時間は潟湖干潟が最も長く、河口干潟、前浜干潟の順に短くなっていきます。このことが乾燥や塩分濃度などの環境の違いをもたらし、それぞれその環境に適したカニや巻き貝などの生きものが生息しています。この展

示コーナーでは、目玉として3つの干潟のジオラマ模型と約2分に縮めた24時間の干満の映像を一体的に展開することで、伊勢湾の河口には3つの干潟生態系が形成されること、それぞれの干潟にはそれぞれの種が生息していることを知ってほしいと考えています。

一方、人の関わりに目を向けると、採貝や定置網、海苔、引網、延縄などの漁業、潮干狩りやたて干しなどの観光レジャー、タンカーや貨物、フェリーなどの海運と様々な形で利活用され、人は豊かな恵みを楽しんでいます。しかしながら、現



前浜干潟をみんなで調べたよ (2013.5.25)

代の人間活動により、夏場に起こる赤潮や貧酸素水塊による底生水生物の斃死、伊勢湾に流れ出たゴミの答志島への海岸漂着、漁場での密漁など、かつての伊勢湾の豊かさが失われつつあります。

平成25年5月9日の松名瀬干潟

このコーナーでは様々な課題を展開し、これから伊勢湾の自然とどのように関わっていければよいかを考えるきっかけになってほしいと思っています。(北村 淳一)



満潮時 (早朝)



干潮時 (お昼)



満潮時 (夕方)

## 東西交流のさまざまな姿 ～海を越えて～

East and West Exchange Over the Sea.

三重の地は、昔から人々の交流が盛んでした。その中でも海路にまつわる交流の歴史・文化をわかりやすく展示します。

熊野灘などの外洋に面し、また、日本最大級の内湾である伊勢湾を擁する三重の地は、陸路と海路が結びつくところでもありました。外洋に面したリアス式海岸の志摩から熊野の港や、穏やかな伊勢湾西岸のラグーン（潟湖）に立地した多くの港は、海を媒介とする交流の中で大きな役割を果たしてきました。また、中世末から近世初期にかけての時期には、遠く東南アジアへと進出した伊勢商人もいます。

このコーナーでは、時代をさかのぼりながら、①北と南をつなぐ船、②熊野灘に行く、③大海への展開、④東との交流、⑤伊勢湾の湊～内湾～、の五つの視点から、海路をめぐる交流史を紹介していきます。また、シンボルとして四隻の船を展示する計画です。

## ① 北と南をつなぐ船

このコーナーは、明治から昭和にかけて桑名の赤須賀港を起点に東紀州地域と北勢地域を往来した「赤須賀船」について取り上げます。赤須賀船には、熊野灘沿岸の鮮魚を北勢地域に運んだ「ナマ船」と、北勢から東紀州に米や日用品を運び、その帰りに東紀州から薪炭等を北勢の都市部に

運んだ「コメ船」とがありました。熊野灘沿岸で「漁師のおるところ、港があるところには、どこへ行っても赤須賀の船があった」と言われ全盛を誇った赤須賀船ですが、やがて、紀勢本線の全通と共にその姿を消して行きます。ここでは昭和前半のコメ船を再現し、港に停泊して米などを販売している情景をジオラマで展示します。

## ② 熊野灘に行く

ここでは、近世の廻船について紹介します。志摩半島から熊野灘沿岸にかけては、リアス式海岸地形を利用した天然の良港が発達していました。江戸と上方（大坂）を結ぶ太平洋沿岸航路の中継地や交易の拠点として尾鷲や須賀利浦などが果たした役割と、一方でこの地域が恐ろしい海の難所でもあったことを取り上げます。また、当時の海上輸送のシンボルである弁才船の復元模型を、石水博物館が所蔵する「太物丸雛形之絵図」を基にして製作します。

## ③ 大海への展開

ここでは、中世末から近世初頭にかけての時期を取り上げます。世界的な大航海時代の到来によって西欧諸国との交流が始まり、日本からも交

易のために海外に進出した商人達がありました。伊勢の角屋七郎兵衛栄吉もその一人で、主に東南アジアでの交易に活躍しました。その姿について、残された資料を基に紹介します。さらに、こうした商人たちの活動のシンボルとして、朱印船を復元展示します。朱印

船に関しては、絵馬等の絵画資料が残るのみで詳しいことがわかっていません。東京国立博物館所蔵の琉球進貢船模型をベースに復元を試みています。

## ④ 東との交流

このコーナーは、中世のお話です。この頃になると、伊勢神宮の御厨が関東各地に誕生します。また、鎌倉幕府の成立によって東西の交流が盛んになったこともあり、伊勢と関東を結ぶ大廻船による太平洋海運が発達しました。伊勢湾岸の湊と東国の湊で展開された交易の具体例を示



今回はここ



鳥羽市日和山方位石レプリカ作成作業風景

しながら、これらについて紹介します。

## ⑤ 内湾の湊

ここも④と同じ時期です。伊勢湾西岸に発達したラグーン（潟湖）は、湊の立地に適した地形であったため、多くの湊が成立しました。その代表として安濃津湊を復元したジオラマを伊勢湾の自然のコーナーとの間に設置し、当時活躍した中世の貨客船を船模型で復元展示する予定です。

(龍川 和也)



安濃津湊ジオラマ検討会風景

## 新県立博物館には驚きがいっぱい 博物館を歩いてみよう

Come discover delightful surprises! Walk through the new Mie Prefectural Museum

このコーナーでは新県立博物館の魅力ある空間、展示室、収蔵庫などをシリーズで紹介していきます

### 企画展示室と交流展示室

The Temporary Exhibition Gallery and The Public Exhibition Gallery.

三重県総合博物館には、基本展示室・企画展示室・交流展示室・こども体験展示室・三重の実物図鑑の5つの展示室があります。今回は企画展示室と交流展示室について紹介します。

基本展示室・こども体験展示室・三重の実物図鑑はいわゆる常設展示室なのに対して、企画展示室と交流展示室は、三重の多様で豊かな自然や歴史・文化を感じられる企画展や、これまで県外まで行かなくては見られなかった巡回展、県内団体・企業などとの連携による交流展など、数週間～2ヵ月程度で定期的に入れ替わる展覧会を行う展示室です。

#### 企画展示室

企画展示室は三重県総合博物館で最も広く（面積約800m<sup>2</sup>、天井高さ約6m）、周囲の壁面に

は展示ケースを配置しています。主に特別展や巡回展など大規模な展覧会を行う予定で、国指定の文化財や他館から借用した貴重な資料などを展示することもあるので、文化財保護のため室内は温度23℃、相対湿度55%で一定に保つことを目指しています。天井がとても高いので、空調は天井ではなく、床にあるスリットから吹き出す形式を採用しています。このため、調温湿は床から文化財等が展示される高さまでだけですみ、展示室全体を空調するよりもコストを削減できます。

一際目を引く正面にある大型展示ケースは、高さ約6m・幅13mもあり、全国でも最大級です。どの展示ケースも照明にはすべてLEDを使用し、展示資料の光による劣化や省エネルギーに配慮し

ています。また大勢の来館者によって室内の温湿度が大きく変化しても、展示ケース内の温湿度を一定に保てるように、どのケースも密閉されたエアタイト構造となっています。さらに背の高いケースなので、上部と下部で温湿度に差が生じやすいため、上部空気を調湿剤で湿度を一定にし、下部から均一に吹出す空気循環システムを採用しています。

企画展示室では華やかな特別展などが行われますが、その裏では貴重な文化財等を安全に展示できるよう考えられています。

#### 交流展示室

交流展示室では、名前の通り、歴史探求や自然観察などを行う県内団体や、民間企業などとともに企画した展示を主に行います。大きな窓からの

採光や、上階までの吹き抜けにより、明るく開放的な展示室となっています。また展示環境を厳しく管理する企画展示室では水を使ったり、土や泥がついていたり、虫やカビなどが潜んでいるかもしれない物の展示や、動植物の生体展示などは行えません。交流展示室ではこういった展示も行えるように床には圧縮コルク材を使用し、見た目は落ち着いた雰囲気ですが、展示やその後の清掃などで濡れても大丈夫な仕様になっています。

交流展示室では、色々な形態の物を展示できるように設計されており、連携団体・企業や来館者の様々なニーズに合わせた展覧会を実現できるよう考えられています。

(間瀬 創)



企画展示室 (The Temporary Exhibition Gallery)



交流展示室 (The Public Exhibition Gallery)

## ただ今 調査研究と資料収集をしています

Research, Investigation, Collection – Forming a Reputable Museum

### 基本展示「磯のくらしと自然」の調査

The Way of Life and Nature in a Seaside Village

基本展示室の「磯のくらしと自然」のコーナーでは、活気ある漁村の志摩市志摩町和具を中心に、磯にくらす人びとと自然のかかわりについて紹介します。三重県は、全国でもっとも海女さんの人数が多いことで知られていますが、県内各地の海女さんたちが、獲物のアワビやサザエなどを

獲りすぎないように、資源の管理に努めていることは、あまり知られていないかもしれません。

調査では、海女さんや漁師さんをはじめ、和具の方々にお話を伺ったり、漁に同行させていただいたりしていますが、実際に見たり、聞いたり、経験をしないと知り得ないことが多く、驚きと感

動でいっぱいです。写真（左）は、旧暦6月1日に、海の安全と大漁を願って行われる潮かけ祭りの様子です。祭りのクライマックスでは、海水をかけ合ったり、海へ投げこんだりするのですが、そのときの臨場感を、写真や映像を通してみなさまにもご覧いただきたいと思います。また、和具に

くらす方々の声をお届けしようと、写真（右）のように、インタビューの撮影も行っています。展示をご覧いただいたときに、調査地を訪れたような感覚を少しでも持ってもらえたらと願って、展示づくりを進めています。（門口 実代）



和具の潮かけ祭り



漁師さんへのインタビュー撮影の様子

### 海を旅するタネ

Seeds Scattered by the Currents.

今年の夏もハマユウの花が美しく咲きました。砂浜で白い花を咲かせるハマユウ（ハマオモト／ヒガンバナ科）



花を咲かせたハマユウ 志摩市にて

*Crinum asiaticum* var. *japonicum* は、三重県内では熊野灘沿岸の砂浜で見ることができます。このハマユウ、実は海を旅する植物なのです。

植物は動くことができません。そこで分布を広げるために、様々なものの動きを利用して種子を移動させます。種子が広がっていくことを散布といい、ハマユウは海の流れを利用する海流散布をおこないます。ハマユウは東アジアから南アジアにかけて分布しており、

日本国内では琉球列島から房総半島南部のおもに太平洋沿岸で見ることができます。このことからハマユウは黒潮の流れに乗って分布を広げてきたと考えられています。ハマユウの種子は長期間、海上を漂うため、厚いコルク質の種皮に覆われて水に浮きやすい構造をしています。また直径3cmもなる種子の中には水分が蓄えられており、砂浜に

漂着するとすぐに発根します。

三重県総合博物館の基本展示室では、東紀州の自然のコーナーにハマユウのレプリカや種子を展示する予定です。どうぞお楽しみに。

（森田 奈菜）



ハマユウの種子

## H25 年度 同定会 ～ピカピカの新博物館で開催！標本の名前を調べてみよう～

A special yearly gathering of specialists to identify biota from the public.

三重県立博物館の夏の風物詩「同定会」。自然界の様々なものの名前を、それぞれの分野の専門の先生方と一緒に調べようというイベントです。「名前が付けられた時に用いられた基準となる標本と、同じものと定める」ということから、名前を調べる行為を「同定」と呼んでいます。しかし、「同定会」のタイトルだけでは何をやっているのかわかりにくいので、近年はサブタイトル

などをつけて分かりやすくしています。今年度のサブタイトルは、「～ピカピカの新博物館で開催！標本の名前を調べてみよう～」です。毎年恒例となった同定会は今年で51回目を迎え、半世紀やってきて新たな第一回目は、来年開館する予定の三重県総合博物館の建物で行いました。三重県総合博物館に博物館機能が移って、初めてのイベントとなりました。

当日は、化石、鉱物・

岩石、昆虫、貝類、植物、脊椎動物の分野の専門家10人が講師を務め、77名の親子連れなどが来館されました。葉脈標本を作って持ちきたり、クワガタムシの種ごとの特徴を尋ねたり、標本の作り方や地層の話詳しく教えてもらったりする光景が見られました。さらに今年同定会では、三重県総合博物館に展示するイワシの模型を、参加者にも作って

いただく「いわしプロジェクト」を同時開催しました。この日の漁獲高は55匹。イワシの模型作りのために来館された親子連れもいて、三重県総合博物館の展示に参加しようと意気込んでいる方々の姿も見られました。（大島 康宏）



会場での様子

## お知らせ

### Event Information

#### シンポジウム「伊勢をめぐる人・モノ・文化の交流」

**日時** 10月6日(日) 13:30～16:30

**場所** 三重県総合文化センター 小ホール

三重の地は、東西交流の結節点であり、全国から大勢の人々がお伊勢参りに訪れたことから、人やモノ、文化の交流が盛んに繰り広げられました。このような伊勢をめぐる交流は、現在までに伝えられてきた美術や資料の歴史などによってうかがい知ることができます。

このシンポジウムでは、伊勢をめぐる交流を物語るさまざまな資料を取り上げ、基調講演や県立博物館・県立美術館・斎宮歴史博物館の学芸員の報告、講演者・学芸員による対談を通して、伊勢の魅力に迫ります。

#### まちかど博物館 三重のまんなか博覧会

**日時** 10月26日(土)～27日(日) 10:00～16:00

**場所** ポルタひさい

まちかど博物館とは、コレクションや伝統の技、手仕事などを仕事場の一角や個人のお宅などで館長さんの語りとともに見ることができ、地域資源を再発見して活用することで地域振興や観光にも力を入れている新しい形の博物館です。津市・松阪市嬉野エリアのまちかど博物館が中心となり、博覧会を行います。当日は体験・実演コーナーもあり、みんなが楽しめるイベントです。

#### 三重しぜん文化祭 in くわな 新県立博物館シンポジウム

**日時** 10月26日(土) 13:40～16:00

**場所** 桑名市民会館 小ホール

三重県内で活動をする自然団体が集まる三重しぜん文化祭において、シンポジウムを開催します。テーマは「知ってる？博物館のこんな使い方」です。博物館に直接関わっていただいている方を招いて様々なお話をさせていただきます。またしぜん文化祭自体は26日(土)～27日(日)に行われており、各団体が、ブースにて日ごろの活動の紹介や研究成果を発表します。ものづくり体験や工作などのワークショップもあり、子どもも大人も楽しめるイベントです。

#### みんなで作る博物館会議

**日時** 11月17日(日)

**場所** 三重県総合博物館

博物館を利用する方法について県民や利用者みなさんと意見交換会を行います。討論も交えて博物館の利用のあり方を一緒に検討します。

### お問い合わせ

三重県環境生活部新博物館  
整備推進プロジェクトチーム

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060  
三重県総合博物館内

TEL : 059-228-2283 (代表)  
FAX : 059-229-8310  
E-mail shinhaku@pref.mie.jp

新県立博物館の情報は、  
ホームページでご覧いただけます。

[http://www.pref.mie.lg.jp/  
SHINHAKU/HP/](http://www.pref.mie.lg.jp/SHINHAKU/HP/)